

「夫人」像 発言に探る

文人の 武蔵野

大岡昇平の長編小説「武蔵野夫人」(1950年)の「武蔵野夫人」とは、誰を指すのでしょうか？

このような問いをあまり見かけることがないのは、わかりきったことだと考えられているからでしょうか。秋山夫人を指していることを前提にして書かれた文章もよく見かけます。しかし、著者の発言

大岡昇平 ④



武蔵野公園の周辺には、豊かな緑が広がる(小金井市で)

である「主人公が通り過ぎていくことで二つの家庭が壊れ

ていく、というテーマで、あれはもと、「夫を愛し得ない女たち」というキザな題があったんだよ。つまり姦通小説だ」に基づいて「武蔵野夫人」を指す対象を登場人物の中で考えるなら、壊れゆく二つの家庭における「夫を愛し得ない女たち」である秋山夫人と大野夫人のふたりが該当することになります。

また、「夫を愛し得ない女たち」が「武蔵野夫人」を指し、通り過ぎていく「主人公」が(タイトルにもなっている武蔵野夫人ではなく)復員兵の「勉」だと捉えるなら、「武蔵野夫人」という題は特定の人物を表すだけではなく、若い男によろめくようなすべての「夫を愛し得ない女たち」を代表する意味もありそうである。

それでは、なぜ「武蔵野」なのでしょう。もともと「やつつけてやるつもり」だったと漏らすほど、大岡昇平は国木田独歩の「武蔵野」を意識していました。なぜ「武蔵野」なのかと言えばその答えは、作中に描かれた「武蔵野」描写を検討することで見出せるように思われます。ですが、それは後述するところとして、ここではまず「大岡昇平とその時代」の武蔵野という文脈から探ってみたいと思います。

大岡昇平は「小金井」といえば、大変な田舎で、武蔵野の真っただなかの感じでした」と振り返っています。渋谷育ちの大岡が都鄙を判断する際の基準にあるのは、今のよう

な繁華街ではなく、「武蔵野の面影を残した古き良き渋谷」であり「田舎から上京してきた貧しい人々が住む場末地域」だったと回想されるような地でした。「武蔵野の面影」を残した上京者のための渋谷よりも小金井ははるかに「武蔵野」だったようです。

大岡昇平にとって小金井は、「田舎」くさい「東京」ではなく、「田舎」そのもの、つまり一つの地方としての武蔵野だったのだと思います。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。